

「非集住地域」における結節点としてのカトリック教会

—地方在住のフィリピン系信徒の動向から—

聖カタリナ大学 徳田 剛

1 研究目的

近年の滞日外国人の構成や来住者の動向については、在日コリアン系人口の漸減、ブラジル・ペルーなどの南米諸国出身の日系人人口の急激な減少が見られると同時に、ベトナム・フィリピンをはじめとする東南アジアからの来住者の増加が目立っている。こうした国々からの来住者には、これまで外国人人口が少なかった地方都市・中山間地域に滞在・移住する技能実習生や国際結婚移住者なども含まれており、外国人住民の「非集住地域」における多文化化への対応、特に言語面・生活面等のサポートが喫緊の課題となりつつある。外国人住民が分散居住しているような地域では、「集住地域」に散見される自助的なエスニックグループ・行政組織・市民団体等の外国人住民を支援するセクターが存在しない、あるいは過小である場合がほとんどである。そこで本報告では、そうした「非集住地域」における外国人住民の結節点の1つとしてのカトリック教会の役割・機能に着目し、とりわけ地方在住のフィリピン系移住者による外国語ミサの立ち上げ経緯や実施状況について概観する。異国の地での信仰を求めて居住地域にあるカトリック教会に参集したフィリピン系のカトリック信徒たちが、次第につながりやネットワークを構築していくプロセスを複数事例の比較を通じて析出し、地方都市や中山間地域などに来住した同国出身者にとってのカトリック教会がどのような場所として機能しているかについて明らかにする。

2 調査方法

報告者は、2012年以降、愛媛県におけるカトリック松山教会、同・今治教会での英語ミサと、島嶼部の今治市伯方町で技能実習生として働く若いフィリピン人男性たちのために不定期で開かれる出張英語ミサの参与観察を行い、ミサ参列者への質問紙調査、教会関係者やフィリピン系信徒グループのキーパーソンからの聞き取り調査などを実施してきた。これらのデータに加えて、フィリピン系移民とカトリック教会についてのシンポジウム資料や地方誌の記事（東北地方、沖縄県の八重山地方など）といった二次資料も参照しながら、「非集住地域」におけるフィリピン系信徒による教会への参集やミサの立ち上げ過程の要点について比較検討する。

3 考察

カトリック教会は、その組織特性から世界各国の中心都市から地方の市町村に至るまで万遍なく小教区（教会）を配置しており、そして国境を越えて信徒が移動した場合には、移住・滞在先の教会に出向いて祈りをささげることとなっていて、外国人住民の集住が見られない地域でも教会に通えば地元で暮らす同胞や信仰を同じくする者とのつながりを作ることができる。とりわけフィリピン系の信徒は母国でも熱心に教会に通っていた人が多く、英語が準公用語になっていて英語によるミサでも必要を充たすことができることから、他の言語圏からの来住者の場合よりも、外国語によるミサの立ち上げの際の障壁が相対的に低い。また、カトリック教会はグローバルな人材交流・人事異動が盛んに行われるため、外国語のミサを担当できる司祭やシスターが配属され、外国語によるミサの担当者を得やすい点も指摘できる。しかし、中には信徒数の減少や担当司祭の異動などの理由でミサの存続が危ぶまれたり、日本人信徒との関係がうまく作れなかったりする教会もあることなどが、運営上の課題としていくつかの事例で確認されている。

—参考文献—

徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子、2016、『外国人住民の「非集住地域」の地域特性と生活課題 —結節点としてのカトリック教会・日本語教室・民族学校の視点から』創風社出版